

令和6年度 研究推進計画

【学校経営計画からの抜粋】

1 学校教育目標

夢にむかって 心豊かに 力いっぱい躍動する 生徒を育てる ～DSP～

2 目指す生徒像

【知識・技能】社会生活に必要な知識・技能・マナー・ルールを身につけた生徒を育てる

【思考・判断・表現】自分の願いや思いをしっかりと表出（言語化）できる生徒を育てる

【学びに向かう力・人間性等】将来をイメージしながら、社会の一員として自立し、働くことのできる生徒を育てる

3 重点教育目標

・生徒一人一人の主体的な学び、個々の力を最大限伸長するための指導の改善・充実を図る
～ 稲穂型カリキュラム・マネジメントの改善・充実～

・「改善・充実」「連携」「協働」

⇒つながりと、協働を意識したチームワークによる課題解決など、学習内容の改善なども含めた学習活動・教育活動の充実

4基本計画作成に当たっての考え方

（4）本校の特色を生かした基本計画作成のために

ア授業充実への期待から抜粋

⇒重要な柱とは「生徒の卒業後の生活」、そして「一人一人の社会（的）自立」

イ来年度基本計画作成に当たってのまとめから抜粋

生徒指導、日常的指導実践など、卒業後の生活を見据えた教育課程の充実や授業改善の取組、地域との連携、進路指導など、学校力の向上を図る経営を全教職員一丸となって進めていただく

研究テーマ

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり

～つながりを意識した教科の取り組み～

研究のおおまかな流れ（それぞれの年度のゴール）

1年次）学科の作業学習の題材や目標の整理

済

・現在の稲穂の特長と課題を、学校全体で共有する。（学年研修や全体研修）

・各学科の作業学習の目標を三観点で整理する。（学科研修：シラバスの作成をイメージ）

2年次）学校全体を通じたキャリア発達の整理

作業学習「学年の目標」や行事を起点に、教科の指導内容や授業の工夫について共有する。

⇒2年間のまとめとして、「稲穂のキャリア発達」として整理・明文化することがゴール

⇒学年内のつながりを意識した授業実践の積み上げと、三観点での年間指導計画の整理

⇒現在の稲穂の特長の共通理解と、課題解決のための方策について考える。（学年研修や全体研修）

研究内容	
A) 授業にかかわる研究	①(教科)三観点での目標の整理 ②(作業)三観点での目標の ver アップ(昨年度のものに+α)
B) つながりの研究	①学年のなかでの教科のつながり ②社会の中で必要とされる環境設定(地域とのつながりの拡充)
C) 学校全体としての研修	①講師を招いての講習会 ②事例をもちいた意見交流会
D) 校外での研修	研究会・視察研修

A) 授業にかかわる研究		
内容	①(教科) 三観点での目標の整理	②(作業) 三観点での目標の ver アップ (昨年度のものに+αする)
ねらい	・单元ごとに三観点での目標の整理をする (年間指導計画の書き換え作業) ・来年度の教科担当者が参考にできるような資料に整える。	・昨年度の研究のまとめの要素をとりいれた年間指導計画を作成する。 ⇒進路指導と作業学習をリンクさせていく

資格

日本語能力試験
JLPT
N2以上
スコア700以上

英語能力試験
TOEFL
iBT
80以上

外国語検定

2020(1) ver. 熊本大学教育学部附属国際支援学校 教材館におけるプロジェクト

高等部

1段階

2段階

項目	内容	1	2	3	内容	1	2	3	
(1) 言葉の特徴や使い方	言葉の働き	A (7) 社会生活に係る人とのやり取りを理解する。言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。	1	2	3	A (7) 社会生活に係る人とのやり取りを通して、言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと。	1	2	3
	話し言葉と書き言葉	(1) 相手の意図を読み取ったり問いたりすることに、間の取り方やなどは意識し読むこと。	1			(1) 話し言葉と書き言葉の違いがあることに気付くこと。	1	2	3
	読解	(2) 漢字の意味を用いた表記や読み仮名の付け方を理解したり文や文章の内容で推察するとともに、句読点の使い方を意識して打つこと。	1		3	(2) 文や文章の中で漢字と假名を使い分けて書くこと。			
	大文や章	(3) 表現した理解したりするために必要な語句の量を増やし、語や文章の中で使うとともに、言葉には、性質や必要に応じて語のまとまりがあることを理解すること。	1		3	(3) 表現した理解したりするために必要な語句の量を増やし、語や文章の中で使うとともに、結果を意にすること。			
	言葉使い	(4) 継続する語句の役割、段落の役割について理解すること。			2	(4) 文と文の連続の関係、語や文章の構成や種類について理解すること。			2
(2) 表現の仕方	語法	(5) 日常よく使われる敬語を理解し使うこと。			2	(5) 日常よく使われる敬語を理解し使えること。			2
	文法	(6) 文章の構成や内容の大体を意識しながら音読すること。			2	(6) 文章を音読したり、朗読したりすること。			2
(3) 我が国の文化	情報と情報の関係	E (7) 考えとそれによる理由や事例、全体と中心など、情報と情報との関係について理解すること。	1			E (7) 原因と結果など、情報と情報との関係について理解すること。	1		
	情報の整理	(1) 比較や分類の仕方、辞書や事典の使い方などを理解し使うこと。	1			(1) 情報と情報との関係付けの仕方を理解し使うこと。	1		
	伝統的な芸術文化	F (7) 読み済み又は本文の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。			2	F (7) 読み済み又は本文の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。			2
(4) 我が国の文化	我が国の文化	(2) 生活に身近なことわざや慣用語などを知り、使うこと。 (3) 著くことに関する次の事項を取り扱うこと。 (4) 書くことに関する次の事項を取り扱うこと。	1			(2) 生活の中で使われる慣用語、故事成語などの意味を知り、使うこと。 (3) 書くことに関する次の事項を取り扱うこと。	1		

イ 今年度だけで終わるのではなく、これを続ける必要性があります。

ウ 生徒に対し、根拠に基づいた説明できる指導を続ける

【まとめ】

根拠のある教科指導となっているか。担当頼みの教科指導となっていないか。

⇒各教科で果たすべき目標は何なのか？

⇒作業学習で果たすべき役割は何なのか？

⇒その2つがどう連携しているのか？

【成果】

・教科については、指導要領との関連や必要性を先生方に理解してもらえた。

・書式についての意見はなかったなので、このまま次年度以降も継続する。

＊改めて、次年度において職員会議などを経て、先生方へ下ろしていく予定

【課題】

・作業学習については、昨年度のものに+αとしてきたが、浸透していない様子。

・地域に開かれた作業学習以前に、「稲穂の作業学習の特徴は？」ということが曖昧であることが問題意識としてあがった。加えて、作業学習の年間指導計画については、提出率が悪い。作業学習を通じて、どういった力をどのように育てるのか指導者の中で曖昧（なのかもしれない）。

【次年度にむけて】

ア) 今年度の年間指導計画書式の本格導入

イ) 授業参観週間などをもうけて、実践の交流をしたい

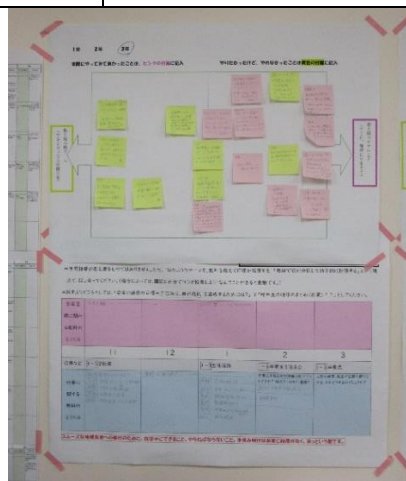
ウ) 可能であれば、年間指導計画とリンクする単元指導計画の書式を設けたい。

「キャリアの稲穂」と言われてきましたが…作業学習と教科指導の関係性など、くずれている

部分の立て直しをしていきたい

B) つながりの研究

内容	① 学年のなかでの教科のつながり	② 社会の中で必要とされる環境設定 (地域とのつながりの拡充)
ねらい	・学年の目標(1年なら「自己受容、他者受容」)をベースに、学年内の横断的な取り組みを考える。	助手の先生を中心に、作業内容の広がりを考える



	① 学年のなかでの教科のつながり	② 社会の中で必要とされる環境設定 (地域とのつながりの拡充)
教科横断 の取り組み	① 学年のなかでの教科のつながり ② 学年のなかでの教科のつながり ③ 学年のなかでの教科のつながり ④ 学年のなかでの教科のつながり ⑤ 学年のなかでの教科のつながり ⑥ 学年のなかでの教科のつながり ⑦ 学年のなかでの教科のつながり ⑧ 学年のなかでの教科のつながり ⑨ 学年のなかでの教科のつながり ⑩ 学年のなかでの教科のつながり ⑪ 学年のなかでの教科のつながり ⑫ 学年のなかでの教科のつながり ⑬ 学年のなかでの教科のつながり ⑭ 学年のなかでの教科のつながり ⑮ 学年のなかでの教科のつながり ⑯ 学年のなかでの教科のつながり ⑰ 学年のなかでの教科のつながり ⑱ 学年のなかでの教科のつながり ⑲ 学年のなかでの教科のつながり ⑳ 学年のなかでの教科のつながり ㉑ 学年のなかでの教科のつながり ㉒ 学年のなかでの教科のつながり ㉓ 学年のなかでの教科のつながり ㉔ 学年のなかでの教科のつながり ㉕ 学年のなかでの教科のつながり ㉖ 学年のなかでの教科のつながり ㉗ 学年のなかでの教科のつながり ㉘ 学年のなかでの教科のつながり ㉙ 学年のなかでの教科のつながり ㉚ 学年のなかでの教科のつながり ㉛ 学年のなかでの教科のつながり ㉜ 学年のなかでの教科のつながり ㉝ 学年のなかでの教科のつながり ㉞ 学年のなかでの教科のつながり ㉟ 学年のなかでの教科のつながり ㊱ 学年のなかでの教科のつながり ㊲ 学年のなかでの教科のつながり ㊳ 学年のなかでの教科のつながり ㊴ 学年のなかでの教科のつながり ㊵ 学年のなかでの教科のつながり ㊶ 学年のなかでの教科のつながり ㊷ 学年のなかでの教科のつながり ㊸ 学年のなかでの教科のつながり ㊹ 学年のなかでの教科のつながり ㊺ 学年のなかでの教科のつながり ㊻ 学年のなかでの教科のつながり ㊼ 学年のなかでの教科のつながり ㊽ 学年のなかでの教科のつながり ㊾ 学年のなかでの教科のつながり ㊿ 学年のなかでの教科のつながり	① 学年のなかでの教科のつながり ② 学年のなかでの教科のつながり ③ 学年のなかでの教科のつながり ④ 学年のなかでの教科のつながり ⑤ 学年のなかでの教科のつながり ⑥ 学年のなかでの教科のつながり ⑦ 学年のなかでの教科のつながり ⑧ 学年のなかでの教科のつながり ⑨ 学年のなかでの教科のつながり ⑩ 学年のなかでの教科のつながり ⑪ 学年のなかでの教科のつながり ⑫ 学年のなかでの教科のつながり ⑬ 学年のなかでの教科のつながり ⑭ 学年のなかでの教科のつながり ⑮ 学年のなかでの教科のつながり ⑯ 学年のなかでの教科のつながり ⑰ 学年のなかでの教科のつながり ⑱ 学年のなかでの教科のつながり ⑲ 学年のなかでの教科のつながり ⑳ 学年のなかでの教科のつながり ㉑ 学年のなかでの教科のつながり ㉒ 学年のなかでの教科のつながり ㉓ 学年のなかでの教科のつながり ㉔ 学年のなかでの教科のつながり ㉕ 学年のなかでの教科のつながり ㉖ 学年のなかでの教科のつながり ㉗ 学年のなかでの教科のつながり ㉘ 学年のなかでの教科のつながり ㉙ 学年のなかでの教科のつながり ㉚ 学年のなかでの教科のつながり ㉛ 学年のなかでの教科のつながり ㉜ 学年のなかでの教科のつながり ㉝ 学年のなかでの教科のつながり ㉞ 学年のなかでの教科のつながり ㉟ 学年のなかでの教科のつながり ㊱ 学年のなかでの教科のつながり ㊲ 学年のなかでの教科のつながり ㊳ 学年のなかでの教科のつながり ㊴ 学年のなかでの教科のつながり ㊵ 学年のなかでの教科のつながり ㊶ 学年のなかでの教科のつながり ㊷ 学年のなかでの教科のつながり ㊸ 学年のなかでの教科のつながり ㊹ 学年のなかでの教科のつながり ㊺ 学年のなかでの教科のつながり ㊻ 学年のなかでの教科のつながり ㊼ 学年のなかでの教科のつながり ㊽ 学年のなかでの教科のつながり ㊾ 学年のなかでの教科のつながり ㊿ 学年のなかでの教科のつながり

【まとめ】

各人が役割分担をして連携した指導をするためには、その「目的」や「目標」の共通理解が絶対に必要。それが十分できていたのか…

【成果】

- ・学年内で(参加者は学年によって差があるが)直接話し合う機会をつくったことで、交流ができた。
- ・前期は行事があるため、教科と連携して指導できる場面が多くあった。

【課題】

- ・教科横断の取り組みは、学年の行事担当や、教科担当のやる気次第による部分が大きい。
⇒学年として、学年主任や行事担当者が音頭をとって、職員間で共通理解をもって取り組まないと広がりや効果も薄い。
- ・道徳の目標(学年の目標)の達成には、どの学年も苦慮し、成果も出しにくい。

【次年度にむけて】

- ア) 道徳の指導計画の見直し(教務で行う)
- イ) アに加え、LHRの時間の使い方の整理が必要(職員の意識の向上や、目標に対する指導が行える時間の確保)
- ウ) 教科や、学習活動に関連を持たせた単元構成の啓蒙

C) 学校全体としての研修

内容	① 講師を招いての講習会	② 事例をもちいた意見交流会
ねらい	生徒指導上の課題に対するアプローチについて知る	組織対応について考える。 ICT 機器の練習 教職員間での対話力の向上
具体的な作業	【現時点で、部内で検討していること】 ・豊明高等養護学校の M プロ ＊可能であれば、夏冬の2回の実施	・不登校対応、ヤングケアラー、保護者対応（家庭支援）など、生徒や保護者、担任が感じている困り感に、学校として対応する作戦を考える。

【まとめ】

本校や、道内で話題になっている事例を先生方に知ってもらうことはできた。
だが、それを日々の実践につなげる部分は、各先生方まかせだった。（そのための理論研修を補完できればよかった）

【成果】

- ・本校の不登校支援について、教務主任と相談支援部より説明する時間を設けることができた。
- ・相談支援部と協力して、ヤングケアラーに関する研修会を実施できた。
- ・豊明で取り組まれている MLA について体験することができた。
- ・進路指導部からの研修は、職員で共通理解を図るための一助となった。

【課題】

- ・日々の業務に役立つための研修も必要だが、特別支援に関わる理論研修もまだまだ必要
- ・講師を呼ぶための予算の確保

【次年度にむけて】

- ・稲穂の進路指導について、全職員が共通の理解のもと、指導ができるように整える必要がある。
- ・先生方の業務を間接的に助けられるような講師の選定を行っていく
⇒ 個別の支援計画、指導計画の目標設定
⇒ 出口の教育としての、福祉サービス利用や他機関との連携について など

「職員全員が参加している研修の場」として、これからも先生方にとって有益な研修会を計

画していく。

D) 校外での研修

研究会・視察研修

【昨年度の視察先】

- ・他の高等養護学校、通信制高校
- ・不登校支援の機関

① 優先的に視察研修を行ったり、研修会に参加したりする順番を決める。

昨年度(2023)	今年度(2024)	来年度(2025)	2026
国語 音楽 家庭	社会 美術 外国語	数学 保健体育 情報	理科 職業
木工	家庭総合	生産技術	環サポ
Co	生徒指導・総務	情報文化	教務・進路

済み

【まとめ】

(昨年度に続き)研修に参加して下さった先生はいますが、担当として、効果的な支出はできませんでした。

【成果】

- ・(オンラインも含め)広く先生方が参加して下さった。(先生方の研修をほんの少しは後押しできた)
- ・昨年度にくらべ、研修参加への抵抗が薄れてきた(断る先生が少なくなった)

【課題】

- ・昨年度に引き続き、担当として、計画性をもって進めることができなかった。

【次年度にむけて】

- ・学校課題解決のための効果的な執行を計画する
- ・先生方の個人研修を広く支援する。

教員の(自己)研修は、今後も必須です。来年度も研修会参加にご協力をお願いします。

次年度は、道外への視察研修を計画したいと思っています。

【まとめ】 今後の校内研究の方向性

⇒行事や教科で取り組まれていることの目的の整理

(なんのための授業なのか、何のための取り組みなのか)



進路指導

～実態（得意、不得意）や適性にあった進路選択ができる指導

⇒卒業後すぐ（18歳、19歳）の進路だけでなく、

卒業後の長いスパン（20～25歳）の地域生活を見据えた進路指導

⇒そのための教育課程全般の取り組みについて整理してもいい時期。



作業学習の充実（のための整理） + 教科指導のとらえ直し



（個のニーズに応じた指導）

職員集団の共通理解

（なんのための取り組みなのか、目的と手段が逆になっていないか）

確認する場としての研究日にしたい。

【考え方や、取り組み方】（ひとつの案として）

